

下人と犯罪

安野真幸

目次

はしがき

第一章 イエ世界と境界領域

イ イエ支配権

ロ 境界領域

ハ 無縁の人としての下人

第二章 「下人之咎 不可懸主人」

ニ 中世下人法の中で

ホ 犯罪下人法の分析

第三章 大転換

ヘ 下人の逃亡と地頭屋敷

ト イエ支配権の制限

あとがき

はしがき

本稿は、下人と犯罪についての考察である。まず第一章では中世の下人が係わりを持っていた世界として、イエ世

界と境界領域の二つを取り上げた。第一章イでは石井進氏の言われる「イエ支配権」を取り上げ、ロでは網野善彦氏の言われる無縁論をマルクスの言う《*Intermundien*》との関連で理解すべきことを主張した。既に拙稿「太郎冠者論——狂言における下人」¹⁾(これを拙稿1とする)において述べた如く、中世の下人は「境の人」・異人として社会から排除と抑圧の対象になっており、又一方、犯罪者は常に、又どんな社会においても、排除と抑圧の対象であったことから、両者は互いに重なりあう面が多かったと思われる。そこで、第一章まではこの下人と犯罪者とが重なりあう面を考察した。続いて第二章では罪を犯した下人の処置を廻る法を中世法の世界に探り、中世の大法たる「下人之咎、不可懸主人」の分析を行なった。特に第二章ホでは、下人達にはイエの外に自由な世界があり、ここで犯した盗み等の罪についての処置を定めたものがこの法であることを明らかにした。

中世社会をイエ世界と境界領域という二つの要素から成るものとして捉えることが出来るとすれば、下人はこの二つの世界に両属する「境の人」であることから、下人を論ずることは同時に中世社会を、更には中世国家を論ずることになる。こうした大問題を論ずることは、私の能力を越えているが、下人に関する限り、中世の前期と後期との間には大きな断層があり、これが網野善彦氏の云われる「民族史的な大転換」に対応していることを第三章では述べた。

第三章へでは、中世前期の守護・地頭等公職にある人の屋敷が一種のアジールとして下人達の駆け入る先であったことを明らかにした。しかしトで明らかにした如く、戦国期に入ると、それまで下人達に対して絶対・不可侵の支配権を持っていた主人権・「イエ支配権」に制限が加えられ、罪を犯した下人に関する限り、イエの支配下にあると同時に、国家の管理下にも置かれるという新しい関係に入ったのである。

尚本稿では近世初頭迄を考察の対象に含ませることとした。なぜなら、①藤木久志氏が「作合否定政策」の再検討を行う中で明らかにされた如く²⁾、地主の農奴主的経営や「下人」借耕にもとづく地主・小作関係を否定する政策は、

豊臣氏の政策には本来的に欠如していた√からであり、又、②拙稿「藪入りの源流——もう一つの魂の行方」⁽³⁾（これを拙稿2とする）で明らかにしたように△家や奉公人の在り方に関する限り、元禄期以前は中世との連続性が強く認められる√からである。

又本稿では中世社会をイエ世界と境界領域として捉えたが、主にイエが共同体の単位として現れてくるのは東国であり、一方西国ではむしろ単位は村落であり、ここでの「境の人」は「間人」⁴⁾等の小百姓であると云う。こうした問題については、殆ど触れることが出来なかった。

第一章 イエ世界と境界領域

イ イエ支配権

下人が罪を犯した場合の処置に関する法令を、成文法たる中世武家法の世界に求めてみても、『結城氏新法度』¹⁵⁾を唯一の例外として、これを除くと対象となるものは殆ど見出すことはできない。僅かに見出すことができるものは、「下人の犯罪に主人は責任を負うべきか否か」という、むしろ枝葉の、限定された問題に関するもののみである。事柄の根本である△下人の犯罪√自身に対して成文法が殆ど無いということは、法の作成主体である幕府や戦国大名達が、△下人の犯罪を、取り上げるべき対象としていなかった√、或は△取り上げることが本来不可能であった√ことによっているのであろう。つまり下人に対しては、他ならぬ其の主人が排他的・一元的な支配権を持ち、上級権力の介入する余地が無いと観念されていたところに、中世社会の特徴があったと思われる。

石井進氏が『中世武士団』⁽⁶⁾において述べておられる如く、 \wedge 中世においてイエは「一つの小宇宙・小国家」であり、主人はその「君主」として家族や配下のもの・子供や家来に対して絶対的な生殺与奪の権を持っていた \vee のである。これを石井氏に倣って「イエ支配権」と名付けるとすれば、下人の犯罪は直接にはこの「イエ支配権」の問題であったことになる。中世のイエが国家権力の介入を許さない自律的な世界として存在していたことは『鎌倉幕府追加法』二六五の「主従対論の禁」⁽⁷⁾から窺うことが出来る。これは \wedge 従者が主人を訴えても幕府はこれを受け付けない \vee ということであり、 \wedge イエ内部の問題に幕府は介入しない、飽く迄も主人の支配すべき問題だ \vee としていたのである。

更に石井氏が『身曳といましめ』⁽⁸⁾で明らかにされた如く \wedge 罪を犯した人は、領主の前で命乞いをし、領主に「いましめ」⁽⁹⁾られて下人となった \vee のであるから、その下人が更に罪を犯した場合、当然主人の懲戒や折檻の対象となったと考えられる。尚こうした犯罪者の下人化の前提には、犯罪者を召人として御家人等に預けるという鎌倉以来の風習の存在、更にその前提として、独立した法圏としての武士のイエの存在を挙げるべきであろう。勿論預かった側の人々は原則として犯罪者を「いましめ」ておかねばならなかったのであるが、これがしばしば主従関係に転化したのである。⁽¹⁰⁾安良城盛昭氏も又、『結城氏新法度』第九十三条や『長宗我部氏掟書』第三十七条から「下人身分」の持つ第五番目の側面として \wedge 過酷な支配の対象 \vee を挙げておられるが、主人が下人を折檻し懲戒すること、或は主人が死の恐怖を以って奴隷を支配することは、奴隷制度に固有の事柄であったと思われる。ヘーゲルは『精神現象学』の中で「主と奴」⁽¹¹⁾について、次のように述べている。

主は奴を支配する。しかしこの支配は奴が主に支配されることを承認し肯定しているときにのみ成立する。奴が死をかけて反抗すればこの支配は成立せず、主も奴も消え失せて、支配体制は崩壊する。奴が奴であるのは、奴が死を前にして後退し、死の中の自由よりも生としての隷属を愛したからである。この意味では死こそが「絶

対的主人」究極的な支配者である。⁽¹⁴⁾

石井氏が明らかにされたこの犯罪下人という在り方からは逆に、保立道久氏が述べておられる如く、中世初期の領主層が犯罪者達・「不善の輩」を抱え込んだものとして現れてくることをもたらしたのである。例えば鎌倉期の大和の国の『起請文落書』⁽¹⁵⁾には、悪党と云われた者の「扶持の所従」を「強竊二盗、放火、殺害、博打、夜田刈族也」とあり、応永二年の『衆徒国民宛事書』⁽¹⁷⁾にも「衆徒国民等、扶持置盜賊族、夜打強盜大袋等、以種々悪行為其業」とある。更に『古今著聞集』巻第十二「強盜の棟梁大殿小殿が事」⁽¹⁸⁾には、小殿という強盜が検非違使庁に自首し、ゆるされて源判官康仲や大納言に召し遣われ、強盜をからめ捉える等の武勇を挙げたことが記されている。この話は私的な主従制が検非違使に代わって強盜取締の主体になった点と、盗人が下人になった点の二点において注目に値しよう。

ところでこの「イエ支配権」はM・ウェーバーの言う「伝統的支配」に属していたため、その実態を証明する史料はあまり豊富ではないが、外国人として戦国期の日本社会を見聞したイエズス会士達が、当時の日本社会に存在した強力な主人権、乃至「イエ支配権」に大いに驚き、次のように述べていることを挙げておきたい。これはイエズス会士達が、国法や官僚制の発達した近代社会初期の住民であり、戦国期の日本社会の方がむしろ、より純粋な封建制社会であったことによっているであろう。

〔1〕ヴァリニアノ『日本巡察記』第一章⁽¹⁹⁾

彼等の間には、世にも奇妙な支配の方法が見られる。彼等はその家庭に於いても、配下の人々に対しても絶対的な君主である。されば彼等は望みのままに、何びとに気兼ねすることなく、家族や配下の者を殺すことができる。自分より上に、さらに別の主人がいようと、その問題に関しては主人を考慮しないから、誰しも自分の子供や家来を殺すことができるのである。単に殺害するのみならず、同様もし望むならその財産を没収することもできる。

〔2〕フロイス『日欧文化比較』第十四章 五.⁽²⁰⁾

われわれの間では、それをおこなう権限や司法権を持っている人でなければ、人を殺すことはできない。日本では誰でも自分の家来を殺すことができる。

〔3〕アキラ・ヒロシ『日本王国記』第一章第六節⁽²¹⁾

各人は自分の家では司直であつて、己の使用人とか、己のパンを食べて生活している者が、もしそれだけのとがあつたら、罰しても殺しても差支えないし、盗賊なら誰でも平気で殺してかまわない。

〔1〕にある主人の財産没収権からは、当然安良城氏の言う「下人」の非所有、所有の非主体⁽²²⁾ということが窺われよう。しかしこの問題は、いわゆる「下人」のみならず、主従制下にある総ての従者達に齊く当てはまることも又、注目しておくべきであろう。この他〔1〕から知ることの出来るものに、イエ支配権においては「下人」と子供は同じものとして表れてくる⁽²³⁾ということがある。ここから下人を子供に引き付けて考えようとする黒田日出男氏の試みが有効であると思われる。

一般に下人が喧嘩をした場合、喧嘩の両当事者にはそれぞれ言い分もあり、理非の主張も有りえたと思われるが、主人の側は「トリアエズの平和」を求め、喧嘩の抑圧のみを望んでいたことから、理非の主張の禁止と同害刑による威嚇、すなわち「喧嘩両成敗法」による兇も角もの喧嘩の防止のみを試みたと思われ、更にこの原則は他人の下人相互間の喧嘩の場合にも適応されていたと思われる。つまり、他人の下人相互間の闘争は、直ちに主人間の利害に跳ね返ってくることから、問題は主人相互間で、しかも「いかに彼等の間に利害の均衡を形成するか⁽²⁴⁾という方向で処理されていたのである。中田薫氏は『法制史漫筆』の「一 大法」の中で、⁽²⁵⁾「喧嘩をして他人の下人を殺してしまつた下人は、主人によつて誅戮されることになっており、これが中世における在地の慣習法たる「天下之大法」の一

つであつた／＼と述べて、次の如き史料を紹介しておられる。

一 於自他之被官等、自然依喧嘩鬭爭致殺害者、不及理非之糾明、為主々之沙汰令誅戮敵人、可止人之憤、且是天

下之大法也

(『高野山文書一』四九七頁「永享十一年卯月金剛峯寺五番衆契状案」)

以上から明らかなように、例えば他人の下人相互間の喧嘩の如く、犯罪の構成要件が総て「イエ支配権」の枠内に収まらない場合でも、「イエ支配権」の原則は十分に尊重されていたのである。

ロ 境界領域

拙稿Ⅰで述べた如く、『結城氏新法度』の世界ではイエの内部で主人の支配下にある下人達は、他方ハレの日には「市町」「山野」「神事祭礼の場」「ばくちの場」等々といった場所に出かけ、自由を謳歌することが可能であり、更にここで下人達は「ばくち」「喧嘩」の外に「やりこ」「押買」「盗」「盗み伐り刈り」「追懸(＝追剥)」と、様々な盗みを行なっている。下人達にかかる自由の場所の存在することは、第二章ホで取り上げるが、ここではこうしたイエと原理を異にする場所の問題を取り上げて行きたい。

『宇都宮家式条』²⁵⁾第五十七条には「鎌倉屋形以下地事」と題して「白拍子、遊女、仲人等之輩、据置彼地事、一向可停止之」とあり、給人に貸し与えた鎌倉屋形以下の地に「白拍子・遊女・仲人等」を置いてはいけないとある。又『長宗我部氏掟書』第三十四、三十五、三十六条には夫々次の様にある。

(34) 一 男留守之時、其家へ座頭、商人、舞々、猿衆、猿遣、諸勸進此類、或雖為親類、男一切立入停止也、若相煩時者、其親類令同心、白昼可見廻、雖為奉行人、門外にて可遂理事、但、親子兄弟可為格別事、

- (35) 一 同留守之時、仏神物詣見物一切停止之事、付、年忌、月忌寺にて可勤事、
 (36) 一 同留守之時、第一出家出入、曾以・禁制也、付、祈禱之時者、可為格別事、

これらは総て「男留守之時」のイエに出入りする人々に関する法令であるが、第三十四条では「座頭、商人、舞々、猿楽、猿遣、諸勸進此類」総じて「男一切」の立入を禁じ、又第三十五条では「仏神物詣見物」を、更に第三十六条では「出家」の出入りを禁じている。以上から大名権力が保護すべき「イエ支配権」の中心には「男」がおり、様々な芸能の民、「出家」更には「仲人」「商人」等はイエ秩序の敵対者と見なされ、「寺社」等への物見遊山もまたイエ秩序への敵対と見なされていたことを窺うことが出来る。更に『相良氏法度』第三十五条にも「はふり、山ふし、物しり」等の漂泊の祈禱師・占い師を「一向衆もとひたるへく候」として相良氏領内への立入を禁止しているが、これ又『長宗我部氏掟書』と同様の政策の表れと見ることが出来るよう。

網野善彦氏の『無縁・公界・楽』⁽²⁸⁾における命名に依れば、それらの人々はいずれも「無縁の人」となる。彼らは門付けをして家々を回ると同時に、彼らに固有の生活の場として「寺社の門前」とか「市町」「山野」等の「無縁・公界の場」があったのである。網野氏はこうした「無縁の場」を最初は「平和領域」とされたが、最近に至り自説を修正され、石井進氏の「厚みを持った境界の領域」⁽²⁹⁾という表現に倣い、これを「境界領域」と言い直され、平和領域というよりもむしろ、その世界内部で起こった出来事、例えば喧嘩口論等は「その場限り」のものとして処理され、△場の外には持ち出されない所^③とされ、或は、△外部の問題を持ち込んではいけない所^④とされたのである。事実、既に拙稿¹で述べた如く『結城氏新法度』の世界では、下人の行なった犯罪に対する結城氏の対応のしかたは「うたれ候共……佗言すべからず」「死損」「斬られ損」「佗言すべからず」と、再審の道を閉ざし、場の外への持ち出しを禁じているのである。

このことを氏は最初、飛礫の場での喧嘩が「その場限り」として処理されたこととして紹介されたが、次の史料の「非其座仁、被懸咎否」の部分で「否」に関する伝統的な読み方に従って「その座に非ざる仁、咎を懸けらるるや否や」ではなく、全体の文意から「その座に非ざる仁、咎を懸けらるるを否む」と読むことを通じて、「其の場限り」性が「市町・浦浜・野山・道路等」の境界領域全体に係わる原理であるとされたのである。³¹⁾

観音冠者殺害事、大郷村人等須以不覚悟者也。其故者、如此鬭争、於市町・浦浜・野山・道路等、俄当座争論事、非其座仁、被懸咎否、其之上隔数町鬭争、依何村人等可被懸其咎乎、関東御式目面明白也。

〔猿投神社所蔵 本朝文粹卷二紙背文書〕

『御伽草子』の「物ぐさ太郎」³²⁾では、「男もつれず輿車にも乗らぬ女房」を女捕る「辻捕」は、「天下の御ゆるし」とあり、「辻」が特殊な法の存在する場所であったことを窺わせる。又、狂言の『真奪い』³³⁾『太刀奪い』からは、「路地」や「市場」で行われた「押買」や「路地狼籍」の実際の姿を窺うことが出来ると同時に、これらの場所が盗み半ば正当化する特殊な法圏であることがわかる。特にこの狂言では、太郎冠者は相手が「眉間の延びたやつ」であるとの理由で彼の持ち物を奪おうとして、却って相手に主人の太刀を奪われてしまい、次に主人と二人して、奪われた太刀を取り戻そうとする。つまり路地や市場は平和領域ではなく、むしろ他人の物を互いに奪い合う場所、*homo homini lupus*（人は人に狼）という状態が形成される世界であったことになる。

以上から明らかなように、日本の中世社会には「イエ支配権」と境界領域という二元性があったのであり、これはオットー・ブルンナーが旧ヨーロッパの「家政学」について述べている「家から出発するものと市場から出発するもの」³⁴⁾に対応していると思われる。このような境界領域のことを、マルクスは『資本論』³⁵⁾の中で次のように述べている。商品交換は、共同体が終るところで、共同体がほかの共同体・又は他の共同体の成員・と接触する点で始まる。

本来的な商業民族は、エピクロスepikrosの神々のように、あるいはポーランド社会の気孔に住むユダヤ人のように、古代世界の《Intermundien》（さまざまな世界のあいだの空隙〔エピクロスの説によればそこに永生不死の神々が住んでいるという〕）にのみ生存する。

これに対して大塚久雄氏は、内部的には平等を旨とし、外部に対しては封鎖されるというM・ウェーバーの「共同体」の構造的二重性の理論から、マルクスの以上の説明に「共同体」の規制力が及ばないと同時に「共同体」の保護の外に置かれた社会的真空地帯というものを付け加えられ、更にここがhomo homini lupusの世界であるとされた。

網野氏の言われる「その場限り」という属性は、大塚氏の言う「共同体の規制力が及ばない」に対応している。しかしそれ以上に、マルクスのいうエピクロスの神々の性格（世界と世界とを隔てる場所に住んで、人間の事柄には全く関心を持たないし、なんの影響も及ぼさない）に正確に対応しているのである。大塚氏の視角が「共同体」の内部にあり、そこから外を恐々眺め、無縁の場《Intermundien》に対しては、否定的な評価を与えていることは明らかである。以上の如き研究史の中に網野氏の無縁論を置いて見ると、境界領域の姿が一段と豊かになっていることを確かめることができる。

日本の中世社会が、一方では独立・不可侵のイエ世界、また一方では特殊な法圏としての境界領域から出来ていたとすれば、このことはまたM・ウェーバーのいう「対内道德と対外道德」という道德の二重性が日本の中世社会に存在していたことを意味しているのである。

日本の中世社会がイエ世界と境界領域の二つから出来ていたとすれば、下人は又ハイエ世界に属すが、常に「余所者」の標しを帯びた者√ハ「お暇」を貰うことで、いつでもイエの外に出る潜在能力を持った者√として、この二つの世界に両属する「境の人」であったことになる。それ故下人は、「外部に対しては内部、内部に対しては外部を意味するマージナルな領域に生きる人々」として、イエの内部では「余所者」と見なされ、イエ世界においては無縁の原理の体現者となっていたのである。以下この問題を述べていきたい。

日本の中世から近世初頭にかけてのイエは、現在の単婚小家族とは違い、夫婦と子供の外に非血縁家族からなる多くの下人達を抱えた存在であり、家長・主人はイエ内部における人間関係と人間活動の総てをハ支配√しなければならず、又当然ここでは自給自足を建前にしていることから、「儉しさ」「儉約」等が経済倫理として重視されていた。近世初頭の博多を代表する初期豪商の島井宗室の家訓とも云いうる『遺言十七箇条』⁽³⁷⁾にはハ貞心・律儀なるべきこと、五十まで後生願い無用、振舞・交友の心得、喧嘩口論に干渉すべからず√等々のほかハ賭事・ぜいたくの禁止、儉約の勧め、主人自ら竈の火を炊くべし、買い物は値切って買うべし、主人夫婦率先して雑炊を食うべし√等とあり、その間の事情を伝えている。尚、『早雲寺殿二十一箇条』⁽³⁸⁾の第十八条、第二十条にも次のようにある。

(18) 一 隙ありて宿に帰らば、既面より裏へ廻り、四壁・垣根・犬のくぐり所をふさぎ拵さすべし。下女つたなきものは、軒を抜て焼、当座の事をあがなひ、後の事を知らず。万事かくの如く有べきと、深く心得べし。

(20) 一 夕には、台所・中居の火の廻り、我と見廻り、かたく申付、其外類火の用心をくせになして、毎夜申付くべし。女房は高きも賤も左様の心持なく、家財、衣装を取ちらし、油断多きこと也。人を召仕候共、万事を人に

計申付べきと思わず、我と手づからして様体を知り、後には人にさするもよきと心得べき也。

それ故イエ内部においては、下人たちは主人に対する反抗として、この「儉約」に敵対し、「主人に損を懸けよう」とすることもあり、また主人側は逆に下人たちを「盗人」とみなし心を許さないでいたのである。前述した島井宗室の『遺言状』の第十条には、「下人下女に至るまで、皆々ぬす人と可心得候」とあり、盗ませない用意や心得が細々と記されている。

また、中世前期に成立した『沙石集』巻第七「人ヲ殺シテ酬タル事」⁽⁴⁰⁾には、手鉾を盗んだ罪で主人によって惨く折檻され、なぶり殺しにあった下人が最後に開き直って言う言葉として「下臈ノ盜常ノ事也」がある。この言葉には「下人が盗みを働くのは当然」という響きがある。更に例えば狂言の『棒縛』附子ではイエ支配権の解体する主人の留守という時期に、下人の太郎冠者・次郎冠者は無縁の人に变身し、イエの中で盗飲みや盗食いをする。また『真奪い』『太刀奪い』においては、主人の御伴をしている太郎冠者はイエの外の道路や市場といった無縁の場において、率先して他人のものを奪おうとする。

既に述べた如く『結城氏新法度』の世界では、下人達はハレの日に「市町」「神事祭礼の場」「野山」「はくちの場」等々といった無縁の場に出かけ、「ばくち」「喧嘩」の外は「やりこ」「押買」「盗」「盗み伐り刈り」「追懸(＝追剥)」と、様々な盗みを行っている。更に『塵芥集』第五十四条には次のようにある。

一 盗人をわたくしに成敗する事、たとひ紛れなき盗人たりとも、成敗せしむるかたの越度たるべし。たゞしその主人へ申届のうへ、主人の成敗につゐては、是非にをよばず。

「その主人へ申届」とあることから、少なくともこの法令が問題としている「盗人」は「主人持ち」のもの、すなわち「下人」と考えられ、下人の出来心による盗み等は、当座の私成敗の対象である」という慣習法が存在を踏ま

え、又当『塵芥集』の原則の一つに△私成敗の禁止▽があることから、当該法令は作られたのであろう。⁽⁴²⁾ともあれ以上から、下人達が無縁の場において盗みを働くことは当時かなり一般的であったとすることができよう。

以上は中世社会が「対外道徳」と「対内道徳」という道徳の二重性を持っていたことから、下人と主人とは互いに生きる世界を異にし、互いに相異なる道徳を持っていたことを示している。このことは、『結城氏新法度』第五十四条に次のようにあることから分かる。

一 味方中の放馬、又洞の放馬失せ候。下女・下人見付け、返すまじきと申、代を取候はんと言事、盗人・追懸可為同前。所望の方候はば、□□□返すべく候。

此の法令は、放馬の所有権のありかについて定めたものであり、労働を通じて直接に自然と関係を結ぶことが強いられていた下人達は△放馬は見付け、手懷けた人のもの▽という労働の論理に立って「返すまじ」と主張し、或は「代を取候はん」としているのに対し、結城氏は主人達の持つ私有財産制の論理・イエ世界の論理に立って、放馬は△本来の所有者のもの▽とし、下人達の本源的な労働の論理を「盗人・追懸（＝追剥）可為同前」として抑圧し、下人達を盗人視しているのである。

網野善彦氏が『未進と身代』⁽⁴³⁾において述べておられる如く、百姓が年貢等の課役を滞納すると、領主は未進の罪の償いとして未進百姓から身代を取るのが「定法」であった。本章イにおいて百姓の下人化のケースとして犯罪奴隷の場合を挙げたが、中世社会においては、未進の罪で下人化する債務奴隷の方がより一般的であったと思われる。しかしこのような領主側の追及を逃れるために、勝俣鎮夫氏が「逃散の作法」⁽⁴⁴⁾で述べている如く、百姓たちは「山林に交わる」「山野に入る」等の逃散を行なったのである。この「山林」「山野」がアジールとして、下人や犯罪人の駆け入る「聖なる場」であったことはいうまでもあるまい。

以上のことを未進百姓の立場から整理すると、未進の罪を負った百姓は平民としての在り方を続けることは出来ないが、そこで採るべき道は二つあったことになる。一つは領主に身柄を身代として取られ、領主の下人となるコースであり、他の一つは「山林に交わり」無縁の人となるコースである。勿論現実には親は百姓を続け、子供や妻が下人化するコース等が一般的であったであろう。しかしその様な場合でも、下人となった子供達が「山林に交わる」可能性は依然として多かったと思われる。

この後者のコースを選んだ者は、犯罪者として常に領主から追及され、捕まれば前者の境遇に置かれることになっていたのである。戸田芳美・河音能平氏⁽⁴⁵⁾も又、「賤しき流浪法師」が定住農民へと成長してゆく第一歩として、彼等の下人化を挙げておられる。このように考えれば、下人と犯罪者・無縁の人との間には赤い糸で結ばれていたことがわかる。

第二章 「下人之咎 不可懸主人」

ニ 中世下人法のなかで

「下人がイエの外で行なった犯罪に主人は連帯責任を負うべきか否か」という問題をめぐる成文法は、犯罪を行なった下人に関する成文法全体の中では大きな比重を占めることになるが、ここではこれを取り上げて行きたい。

『吾妻鏡』⁽⁴⁷⁾仁治二年三月二十五日の条には、加賀国の地頭、庄田四郎二郎行方が盗人新五郎男の主人岩本太郎家清を盗人同罪と訴えたが、幕府評定は「所従の盗犯を主人に懸くるの条、物議に背くか」を論拠にこれを棄捐したとある。このことは「所従の咎を主人に懸くるや否やの事」として、そのまま『追加法』⁽⁴⁸⁾にも収められている（立論の都

合上、これを「追加法」と名付ける）。この「追加法」の内容は「下人之咎、不可懸主人」とまとめることができよう。ところで幕府法は自律的なイエ支配権の存在によって規制され、イエ・在地領主相互間の関係の中で生ずる紛議の調停法的な要素が大きな比重を占めることとなったことから、この「下人之咎、不可懸主人」はイエ支配権に規定された中世国家法の原則であると考えられるのである。

下人「奴婢説に立つ磯貝富士雄氏は、鎌倉幕府の出した法令『御成敗式目』五十一箇条・『追加法』の中で奴婢身分に関する法令（五十二箇条）を次の三つに分類しておられる。①奴婢所有権をめぐる相論解決の原則を示したものの（二十五箇条）、②不当な奴婢所有を禁止したもの（二十五箇条）、③その他（二箇条）。ところで、当該「追加法」や次に述べる『御成敗式目』第十四条（これを立論の都合上「式目法」と名付け、a～fの符号を付けた）はこの「その他」に分類されている。これを掲げると次のようにある。

「式目法」 （『御成敗式目』第十四条）⁵¹⁾

一 代官罪過懸主人否事

A右為代官之輩有殺害以下重科之時、件主人召進其身者、主人不可懸科但為扶代官、無咎之由主人陳申之處、実犯露頭者主人難遁其罪、仍可被沒収所領、至彼代官者可被召禁也、B兼又代官或抑留本所之年貢、或違背先例之率法者、雖為代官之所行、主人可被懸其過也、加之代官若依本所之訴訟、若就訴人之解状、自關東被召之、自六波羅被催之時、不遂參決、猶令張行者同又可被召主人之所帶、但隨事之跡可有輕重歟

『中世政治社会思想 上』の頭注において、笠松宏至氏は「本条の規定が代官であって、一般の従者でない点に注意する必要がある」と述べ、更に、先の「追加法」を取り上げて、「従者の罪を主人に懸けざることは中世法の一貫した原則であり、その上に本条が立てられている」としておられる。⁵²⁾確かにこの法令は、守護代・地頭代等の「代官」

の犯罪が「主人」に懸るか否かを問題としており、Bの部分は特にその点が顕著である。

ところで高橋昌明氏は、「一口に下人・所従といっても、決して其は単一の社会階層で無いことに留意する必要がある」とした上で、「たとえば、郷司・庄司、地頭・公文・借上など多彩な人々が、それらの呼称のまま同時に下人あるいは所従と呼ばれている」事実を明らかにしておられる。それ故、ここで云う「代官」は、笠松氏の主張されるところ「主人の分身」であり、その点で「追加法」の下人とは異なる存在であるとしても、前半Aの部分は、主従制下にある総ての従者達に係わる中世法の原則であり、笠松氏の如く「代官」宛規定〳〵と限定するには当たらないと思われる。

戦国家法の中には、この「式目法」とほぼ同一の法令を見出すことができる。『今川仮名目録』第十條、『塵芥集』第十八條、『甲州法度之次第（二十六箇条本）』第十八條、『新加制式』第十一條がそれである（立論の都合上、これを順に「今川法」「塵芥法」「甲州法」「新加法」と名付ける）。これらは総て「代官」でなく「被官」乃至「被官人」を問題としているが、前述した理由から、これらも又、中世法の原則に根差した下人法とみなすことができよう（立論の都合上、これらの法令を「犯罪下人法」と総称する）。

尚、一般に『今川仮名目録』と『甲州法度之次第』との間には母子関係が認められるので、「今川法」と「甲州法」とは同一系統の法と云うことができる（立論の都合上、両者に $g \sim k$ 、 $g' \sim k'$ の符号を付けた）。又「塵芥法」を $A \cdot B \cdot C$ に三分解し（Aには $l \sim p$ の符号を付けた）。「新加法」（立論の都合上、事書に q 、 r 、本文に $s \sim x$ の符号を付けた）はこれまでのものと多少趣を異にしているが、順に挙げると次の如くなる。

「今川法」（『今川仮名目録』第十條）

- 一 被官人喧嘩并盜賊の咎、主人かゝらざる事は勿論也。雖然未分明ならず子細を可尋など号し、抱をくうち、

彼者逃うせば、主人の所領一所を可没収。無所帶ば、可処罪過。

「甲州法」(『甲州法度之次第』第十八条)

一 被官之喧嘩并盜賊等事、不可懸主人事勿論也、雖然、欲糾実否之處、件主人無科之由、頻陳申、相抱之半令、逐電者、主人之所帶三ヶ一可没収、無所帶者、可処流罪也。

「塵芥法」(『塵芥集』第十八条)

一 A₁人の被官以下人を殺し、其則逐電候はゞ、主人に咎をかけべからず。たゞし主人、殺害人を許容におゐては、同罪たるべし。B又くだんの科人、主人格護のよし、敵人相支へる事あり、その当座ならば、主人在所を捜させべし。然に後の日これを聞、その主人許容のよし申出づるとき、証拠紛れなくば、前に載するがごとし、又敵人の支へ候事証拠なくば、主人の咎あるべからざる也。Cたゞし又主人の遺恨あるのあひだ、被官その憤りをとげんために、人を殺し逐電のうへ、主人相知らずといふとも、その咎をのがれがたし。然にかの科人を、主人生害させ、罷り出で候はゞ、以前の咎をゆるすべきなり。

「新加法」(『新加制式』第十一条)

一 被官人罪科、懸主人否事

右被官人重科之時、猶於抱惜者、主人可懸咎、仍三ヶ年可被没収所領半分但爲決実否、暫相抱其人者、非主人之過、然者犯科治定之時、隨咎之輕重爲主人可加成敗、若及其期、各人逃脫之旨雖申之、主人可懸其咎也。

「式目法」bには「件主人召進其身」fには「至彼代官者可被召禁也」とあり、「新加法」vにも「爲主人可成敗」とあり、更に「塵芥法」Cにも「かの科人を主人生害させ、罷り出で候はゞ」とあることから、前章で取り上げた下人に対する主人の排他的・一元的支配権、すなわち「イエ支配権」の存在を確かめることができる。

ともあれ犯罪下人は、犯行現場での斬殺等の処罰をうまく免れたとしても、いずれは主人によって生害させられるのが決まりであったと思われる。なぜなら、下人は本来罪を犯さないように「いましめ」られているにも拘らず、犯罪を行なったとすれば、この下人には本主のほかに、被害者側からも彼の身柄に対する支配権が主張され、原理的に二重支配状況に陥るからである。それ故、犯罪下人は「塵芥法」^mの如く、犯行現場から直ちに「か、或は「今川法」^j「甲州法」^jの如く一旦主家に立ち戻った後に、逐電する「V」のが常であったと思われる。「金剛峯寺五番衆契条案」においても、先に挙げた「天下之大法」の後に「但敵人為遁自身之罪科令逐電者、聞出彼之在所為此衆中可行死罪」⁵⁷⁾とある。

それ故もし下人が弁明を望むなら、主人のもとを逃れ、寺院等に走り入りを行なうより他に手は無かったと思われる。田中久夫氏「戦国時代に於ける各人及び下人の社寺への走入」⁵⁸⁾、網野善彦氏「若狭の駆込寺……万徳寺の寺法……」⁵⁹⁾は、こうした問題を取り扱った論考であるが、「各人及び下人」ではなく、むしろ「下人の各人」が走り入りの中心であったと思われる。万徳寺所蔵の守護武田氏の正昭院宛の文書には、次のようにある。

正昭院事、当国真言衆為本寺条、祈願所ニ相定置之間、或闘諍喧嘩、或殺害刃傷、或山海之両賊、其外雖為如何様之重科人、正昭院并宝聚院へ走入就憑儀者、子細申届可為扶持、若彼の主人及違乱欲遂誅討者、堅申付可令成安堵候、恐々謹言

十二月七日

信豊（花押）

正昭院御坊

（『小浜市史・社寺文書編』収録）

この場合、寺の中に駆け込むのは闘諍喧嘩、殺害刃傷、山賊海賊等の重科の「科人」なのに、彼を追い求めて来るのは「下人の主人」である。武田氏や正昭院がこのことに少しの矛盾も感じなかったのは、駆け込む主体が「下人の

咎人√であったからではなからうか。万徳寺に駆け込んだ下人達は寺男等になるのでないとすれば、近くの金屋の鋳物師や猿桑・山伏等、網野氏のいわれる「無縁の人々」の群れに加わっていったのではあるまいか。『山椒太夫』の物語では、山椒太夫の許を逃れ、国分寺に駆け込んだ逗子王はその後乞食の群れに加わっていく。

又「塵芥法」Cからは、主人の遺恨を被官がはらした場合、主人間の喧嘩とみなされ、主人は「その咎を逃れがたし」とある。更に「然に」以下は、殺人に対しては、科人の生害が同害刑として対応しており、前述した「天下之大法」と同じ原則が働いていることを見ることができる。これを勝俣鎮夫氏は「相当之義」と呼び、当時の人々が争いを納める原則としていたことを明らかにしておられる。

ホ 犯罪下人法の分析

「式目法」のAの部分に注目すると、ここは更に逆説を示す「但」の語を挟んで前後に二分割が可能で、前者を「原則部」、後者を「例外部」と呼ぶとすれば、両者は共に「大前提」(a・d)、「小前提」(b・e)、「結論」(c・f)からなる三段論法をなしていることになる。以上のことを前提として先に挙げた「追加法」を見直してみると、当該法は「原則部」の「大前提」と「結論」の二要素からのみ構成されていることになる。同様に、「今川法」と「甲州法」は「雖然」を挟で、また「塵芥法」Aは「ただし」を挟でそれぞれ「原則部」と「例外部」とに二分可能で、更に其の中にそれぞれ「大前提」「小前提」「結論」の三要素を指摘することができるので、「式目法」との間には△表1√の如き対応関係が認められよう。

このように考えることが許されたとすれば、いくつかの不一致があるとしても、これら「犯罪下人法」は△表1√

△原則部
△表2▽

新加法	s	t	u
式目法	a	d	f

△例外部
▽

新加法	v	w	x
今川法	i	j	k
甲州法	i'	j'	k'

△表1▽

	原則部			例外部		
	大前提	小前提	結論	大前提	小前提	結論
式目法	a	b	c	d	e	f
今川法	g		h	i	j	k
甲州法	g'		h'	i'	j'	k'
塵芥法	l	m	n	o		p

(j・j' は咎人逃亡、mは咎人逐電)

の如く、皆同一の構成をなしているということができよう。このことは、これら「犯罪下人法」のいわば骨格をなす「原則部」と「例外部」との夫々の「大前提」「結論」の部分が、民間に存在していた、例えば「被官の咎主人にかくべからず、但し咎人許容においては主人同罪」等という法諺を文字化して作られたものであることを示していると考えることが出来るのである。

「新加法」の本文も又、「但」の語を挟で「原則部」「例外部」に二分可能で、その各部分と「式目法」、「今川法」「甲州法」との比較を試みると△表2▽の如くなる。「原則部」s…t…uがそれぞれa…d…fと対応しているとみなしうることから、この部分は「今川法」「甲州法」「塵芥法」に共通するa…c…d…fの省略圧縮型と考えられ、ここから、「結論」が諸法とは逆に「主人可懸咎」となったとすることができよう。⁶¹⁾

ともあれこの「新加法」の特徴は△犯罪下人は被害者側のもの▽という観念を前提として、「為決実否、暫相抱其人者、非主人之過」と述べて、本主の「イエ支配権」の再確認をしていることなのである。これは西国大名である三好氏と東国大名である今川氏・武田氏・伊達氏との間に下人の在り方や「イエ支配権」をめぐる

認識に相違があったことを示しているのではなからうか。『新加制式』第十二条、第十三条には夫々「譜代相伝被官人事」「一季奉行輩事」とあり、ここから当時三好氏の領国内には近世の「一季奉公人」と同様「経歴諸方、而致奉公」「一季奉公輩」の存在したことが確かめられる。一方、『塵芥集』第一四七条には藤木久志氏が注目しているごとく、⁶²⁾下人の身分解放の道を示唆した法令がある。

一 下部の男・女、身の代をたつべきよし申、主人納得せざるのうへ、身の代たてたりといふとも、被官に召使わ
れべきよし、深く望みをなすによって、主人身の代をとる。然処、彼下人余の主をとる事あり、本主人の方へ急
ぎ返すべき也。(後略)

ここから、「身の代」を支払い下人身分からの解放を勝ち取ったものが、自分を「一季奉公輩」と見做していたことを確認することが出来る。しかし伊達氏は「経歴諸方、而致奉公」を禁じ、「一季奉公輩」の存在を体制的に否定しているのである。

又『御成敗式目』第四十一条では奴婢雑人の取得時効を十年と定めているが、これは『甲州法度』第十五条・『新加制式』第十二条・『長宗我部氏掟書』第三十七条などに採用されている。一方『今川仮名目録』第六条ではこの部分が二十年とあり、『塵芥集』第一四三条は、『式目』四十一条をそのまま引き写しながら、この取得時効の部分を省略している。また後北条氏の人返しを廻る裁判でも「式目」の時効十年は全く意味を持っていないという事実がある。以上から、勝俣鎮夫氏は「下人に対する強力な本主権の習慣が東国にあったか、または本主権を強力にバックアップすることが東国大名に共通する政策であった」と述べておられるが、先の「新加法」をも共に考えあわせるなら、下人に対する本主権や「イエ支配権」に関して、東国と西国とで習慣の違いを認めることが出来るのではあるまいか。『新加制式』における法令の配置を見ると、「新加法」たる第十一条は、第十条の「号咎人、不究事由、而令殺害

事」の次に並んでおり、又、当「新加法」とよく似た第二十二条の「被官人及攻戦、其咎主人否事」も、第二十一条の「号咎人追求之時、自他方令出合殺害者」と並んでいる。以上から「新加法」は、△咎人が主人のイエに向かって逃亡する▽ことを前提としていると考えることが許されよう。更に「塵芥法」のBから明らかな如く、「塵芥法」が想定している場面も又、△盗賊・殺人などの重科を犯した下人が、主人のイエ内部に逃げ帰り、被害者側がこれを求めて主人のイエの門口に迄やって来て、犯人の引渡しを求めて主人と問答に及ぶ▽という事態である。ここから一般に、「原則部・大前提」にある「殺害以下重科」等々の「咎」とは、主人の下人に対する排他的・一元的支配権の及ぶ世界の内部、すなわち、イエ内部で発生した犯罪ではなく、△主人の支配権の及ばない、それ故、下人にとって「自由」な世界で発生したものである▽ということになろう。

更にこのことの前提として、△下人は主人の支配権の及ばない自由な世界で、自由を謳歌することが可能であった▽ことを挙げなければならない。笠松氏の云われるごとく「下人之咎、不可懸主人」が、「中世法の一貫した原則」であったとすれば、それは中世を通じて、下人にはこのような自由な世界が存続していたことを示すものに他ならない。『今川仮名目録』第七条後半の「他人の下女に嫁す輩」の部分では、下女のもとに通ってくる下男が、いきなり夜這いに押し掛けて来るのではなく、△予め「主人」や「傍輩」に断り、二人の関係を披露している▽ということを前提としているのである。このことが可能であるのは、主人のイエの外で下人や下女が自由に交際できる場所が、今川の領国内に数多く存在したからではあるまいか。⁶⁴⁾

ともあれ、「式目法」以外の戦国期の「犯罪下人法」に共通する△下人の各人が犯罪現場から主人のイエに向かって逃亡する▽という事態の前提として、主人のイエがアジールの機能を持っていたことが考えられる。「今川法」のiに「抱をくうち」、「甲州法」のiに「相抱之半」、「塵芥法」のoに「主人殺害人を許容においては」とあり、

「新加法」^{q, r}にも「右被官人重科之時、猶於抱惜者」とある。これらから明らかなことは、△下人の咎人が主人のイエ内部に匿われている√ということであり、主人のイエのもつアジールの機能がこれらの法における中心的問題をなしているということである。つまり、如何なる上級権力の介入も認めない排他的「イエ支配権」が、逆に咎人を保護する方向で働いた場合を戦国諸家法の「犯罪下人法」では問題としているのである。

いわば国家法として認められていたことは、このような絶対的な「イエ支配権」の存在が結果として下人の犯罪を野放しにするという事態、下人に対しては無法状態という事態を如何に避けるかということであり、「主人も同罪」という強い姿勢で、「イエ支配権」を制限しようとするところに、これら戦国期の「犯罪下人法」の存在理由があるのである。このように考えれば、「犯罪下人法」が戦国期に入って初めて様々な展開を示しているということの意味もうなずけるのではあるまいか。

第三章 大転換

へ 下人の逃亡と地頭屋敷

ヘーゲルの云う如く、下人が下人であるのは唯彼が主人の支配を承認し肯定しているからであって、安寿と逗子王の如く、主人に対して「遂げての奉公は成るまいぞ」と決心してしまえば、下人が主人の許から逃げ出すのを誰も止めることはできなかったのである。この時代下人の逃亡が如何に日常茶飯事であったかは、恵信尼の書簡⁶⁵⁾から窺うことが出来る。一方、下人が主人の所有物であることは、『御成敗式目』の第四十一条に十年時効取得法があることか

らも明らかな如く、主人間の社会的相互承認⁶⁶⁾に基づく事柄であった。それ故下人が逃亡したり、或は自主的に主取りをすることに対しては、主人の側は専らこの「社会的な承認」に訴えて主人権を守ろうとしたのである。

例えば鎌倉中期近江の国において、僧信西の相伝の下人である鏡染次郎は一度逃げて延暦寺の寛賢美野律師のもとで宮仕えしたが、重代の所従であることが発覚して連れ戻された後、更に又「郡守護代西行房御宿所へ逃げ入」り「重代の所従にあらず」と訴えたことに對して、信西は在地の人二十九人の証判を添えて相伝の由緒を訴えている。⁶⁷⁾ 信西側の主張の要点は、峰岸純夫氏の言われる如く、「在地顯然」というところにあつた。ところで一方「郡守護代の宿所」等への走り入りに關しては、『鎌倉幕府追加法』七一九に次のようにある。

一 令逃雑人咎分限事

右、抱置人下人之處、本主人与雑人遂問注之日、地頭為雑人方人、以代官雖遂對決、任相伝可召渡之由、蒙御成敗、本主人行向、欲請取之處、乍有其庭、自後園彼奴令逃失畢、仍差日限、不尋出于其内者、可有咎之由、雖被仰舍、于今不尋出之咎、分限傍例不審候、本主人有道理者、弁其代之外、不可有別科候、本主為顯然⁶⁸⁾、僻事者、不及沙汰候歟、

門注所返答

執筆長田 (年代未詳)

ここから明らかなことは、守護とか地頭といった公職にある人の屋敷は皆アジールとしての機能を持つており、ここに逃げ込んだ下人達には本来禁止されていた「主従對論」が可能となり、主人を裁判所に訴えることができたのである。この実例として南北朝期の太良庄において債務奴隸の藤三郎時真が主人正弘を守護所に訴えた場合とか、前述した鏡染次郎の場合を挙げることができる。同じく『鎌倉幕府追加法』二〇九の「奴婢雑人法」には次のようにある。⁶⁹⁾

一 境越下人事、如去四月二十日御教書者、於地頭所従者、前々事不及改沙汰、自今以後、可令糾返之、至百姓下

人者、為十ヶ年内者可返与云々、而地頭所従与百姓下人令分別者、還有沙汰之煩、更無落居之儀歟、者云地頭下人、云百姓下人、於前々事者、共以以不及沙汰、至自今以後者、相互可令糺返也、早守此旨、可被加下知之状、依仰執達如件、

寛元元年七月七日

左近将監判

加賀民部大夫殿

この法令も又、地頭屋敷の持つアジュールとしての性格を前提としたもので、△地頭のイエ屋敷に逃げ込んだ下人といえども、今後は「人返し」の対象となる▽とあることから、この時点で逃亡下人に関する幕府の関心が「時効取得」より「人返し」に重点を移し、社会総体の利益を守護する立場に立っていることを窺うことが出来る。

藤木久志氏の明らかにされた如く、南北朝期以後になると下人の走り入りに対しては、本主人と現主人との利害の対立を避け、更に個々の下人支配を保証するために、主人達の共同意志・共同組織としての在地における「人返し法」「人返し協約体制」が「一揆契状」として登場してくる。つまり前述した「社会的承認」が法的にも制度的にも形を整えてくるのである。一方、「徳政」についての最近の研究に依れば、△あるべきところへもどす▽ことを意味する徳政は、物と人との呪術的一体感が信じられている社会を前提しているという。つまり、物と人との関係が社会的承認により初めて現実的なものになる世界においては、物に対して予め「本来の所有者」という觀念や、「人物・神物・仏物・僧物」等々の区分がなされておき、その社会的承認に沿って、物を仮の所有者の許から真の所有者の許に戻すことが「徳政」と言われたのである。

「徳政」が臨時的であったのと比べ、この「人返し法」は在地に政治的な対立が無い限り、常に所有物としての下人を本来の所有者のもとに返す仕組であり、その点でこの「人返し法」は「徳政」の最も極端な形態ということが出来る。その理由の一つとして、所有の客体としての下人が足を持ち自由に「走る」事が出来たことを挙げうるの

はあるまいか。この「徳政」の行われる世界はイエ連合の世界であり、一方この世界の外に第1章ロで述べた「其場限り」性を持つ境界領域の世界がある。この境界領域では「徳政」は原理的に相入れない関係にあったことから、下人達は取敢えずこの境界領域に向かって逃亡を企てたのである。

『追加法』二〇九にある「境越下人」とは、境界領域を越え、遠くの世界からやって来た無縁の人のことであり、それ故当然、新しい主人の支配下に置かれるべきものと見做されていたと思われるが、この法令の前提には、本主が新主人に対して人返しを要求する事態が考えられ、政治社会の成熟と共に、人返しの体制は次第に整って行く方向にあったと思われる。それにも拘らず、守護・地頭等公職に有る人の屋敷がアジールとしての機能を持っている例として『相良氏法度』第四条を挙げる事が出来る。

一 譜代之下人之事者、無是非候。領中之者、婦子によらず、来候するを、相互可被返也。寺家・社家可為同前。其領中より地頭に来候する婦子は、其領主のまゝたるべし。

この法令も又、相互に人返しを命じたものであるが勝俣鎮夫氏はこの例外規定である「領主のまゝたるべし」とある「地頭に来候する」の「地頭」を八地頭居住地近くの町場^{（イ）}としておられるが、「地頭屋敷」と考えて差し支えないのではあるまいか。

中世前期の社会は全体として流動性を持っていたことから、下人が定住と漂泊を繰り返すことは、ある意味では当然であったと思われる。その中で地頭は農民にたいして勸農・散田作人の割り付けを行う等、農民の定着化を図っていたことから、農民に対する「公平と撫民」の一環として、下人に逃亡を勧めたり、下人の訴えを聞いたりすることが行われていたと思われる。地頭屋敷に逃げ込んだ下人達には、地頭の下人・所従になるコースの他、浪人として在家に招き据えられ、小百姓化するコースも又あったと思われる。中世前期の地頭が百姓を下人化しようとしたことは

有名であるが、この働きが下人達にとっては、解放への一つのチャンスにもなっていたのである。

『追加法』二〇九からは、地頭屋敷へ走り入りをした「境越下人」が、地頭の「下人」となる場合と「所従」になる場合の二つを知ることが出来る。ところで牧健二氏⁽⁷⁶⁾によれば、この「所従」は「武士の奉公人であるが、郎従の如く武士ではなく、封建的関係の下に立たなかった。一般の農家においては下人と呼ばれるものに相当した。」「有事の際には歩卒となって従軍する義務を負った」とある。地頭屋敷の持つアジールの性格は、一つにはこうした武家奉公人の確保を狙ったものと見ることが出来るよう。次の『塵芥集』第一四九条の「近習」と「下人」の差異も又、これと同じことを示している。武家奉公人となり、武士のメンバーに加えられることは、当時身分解放につながると考えられていたのである。

一 子細あって、下人をひきあげ、近習のものに召使ふところに、其子どもまぢまぢの主をとる。謂なきものなり。
根本の道理にまかせ、数多ありとも、ことごとく本主人のままたるべきなり。

この法令から、△近習となれば下人と異なり、子供の処分権を得る▽、或は△親が近習となれば子供は自由人となる▽という当時の人々の考えを導き出すことが出来るよう。尚この法令は勝俣氏の指摘される如く、侍・武家奉公人と百姓との分離を示すものと考えることが出来ることから、第一三九条の「地下人、又被官の子召使ふべからず、指南いたすべからず」との共通性を指摘することが出来るのである。

斎藤利男氏が明らかにされた如く、これまで「在地領主」と言われて来た鎌倉御家人達は、鎌倉街道沿いの地方都市等いずれも都市的な場に居館を構えていたのであるから、守護・地頭等公職にある人の屋敷がアジールとしての機能を持っていたとすれば、彼等の屋敷地は同時に無縁の場・境界領域であったことになる。その理由として、世界と世界を結びつける働きをする政治の中心地が、本来世界と世界を隔てる境界領域の唯中に置かれたものであることを

挙げることが出来よう。守護職・地頭職を始め、「職」の体制でこの境界領域を組織するところに中世前期の国家があったとの理解が可能とすれば、一つの解決になろうが、後の考えを待ちたい。

ト イエ刑罰権の制限

「イエ支配権」の独立・不可侵性や特殊な法圏としての境界領域の存在を考えるならば、日本の中世社会が多元的・分権的であったことは云う迄もあるまい。こうした多元的な法圏の分立を背景に下人達は盗みや逃亡を行なっていたのであるから、下人達にはかなりの自由が存在していたと考えることが出来よう。しかも強調されるべきは『追加法』七一九である。中世前期にあつては、国家権力は下人の逃亡を助ける側にあつたのである。しかし、戦国大名達の方ではこの境界領域を自己の支配下に繰り込みつつ、他方では検断権を梃子に「イエ支配権」に制限を加え、中世社会の持つこの多元性・分権性を自らが国家になることによって一元化しようとしていく。

『相良氏法度』第三十三条、『今川仮名目録』第十三条、『塵芥集』第六十条、『六角氏式目』第三十条・第四十四条はいずれも「夜討、山立、屋焼之事」「窃盜、強盜・博打」「盜人」「山賊、海賊夜討、強盜ならびに道路追剥」「博打」の仲間からの△返り忠△を認めたもので、△イエの不可侵性△をこのような犯罪に限って否定しているのである。『相良氏法度』第十四条、『塵芥集』第十九条、『結城氏新法度』第九十三条からは「寺家・社家」、「人の在所」「坊寺」、「寺房・道場・比丘尼所」の持つアジュールとしての機能が否定されている。

『塵芥集』第三十三条・第六十四条、『結城氏新法度』第十六条からは、「他国の商人、修行者」「他国の商人、其他往復の万民」が殺人や盗犯にあつた場合、追剥が「洞のものは不及是非、行脚・往来何にても、はりとり殺し候」

場合、犯罪の行われた後先の郷村の連帯責任とすることを窺うことが出来る。これは道路の「無縁性」や無縁の場の持っていた「其場かぎり性」の否定である。何よりも重要なことは、『塵芥集』第一四一条には「下人の男女、そのほか走入の事、すこしの間も許容あるべからざる也」とあり、強い調子で下人の走り入りを禁止し、又第六十九、七十二、一四四、一四六、一五〇の各条からは、「人返し法」に敵対し逃亡下人を所有する人を「盗人同罪」とし、更に第四十七、四十八条では、人返しの際の礼銭や人返しの途中で起きた事故の措置を定めていることである。

『結城氏新法度』には、「人返し法」の条項は見当たらない。しかし第二条には「自然其身の召使ひ候下女・下人、放すべきに候はゞ、能々子細を披露候て、印判を取り、売り放すべし」とあり、又第二十四条には「敵地・敵境より来候下人・悴者、仕ふべからず」とある。ここから明らかなことは、下人の売買には結城氏の印判が必要とある如く、結城領内の下人達は全体として結城氏の管理下にあったということである。以上伊達氏、結城氏の二例から明らかなことは、逃亡下人の問題はイエ相互間で処理すべき問題ではなく、「一揆契状」の場合と同様、各イエを超えて伊達・結城両氏自身の関与する国家的問題となっている事である。つまり、下人の走り入りは後北条氏における「国法」の場合と同様に、国家に敵対する犯罪となっているのである。

又『相良氏法度』第三十二条には「人の下人、身をぬすみ候而出候事候」とある。ここから下人の逃亡、即ち下人がイエ世界より逃亡することは、下人が主人から彼自身の身柄を「盗む」ことと観念されていたことがわかる。ここから『塵芥集』第六十七条にある「逃盗」も、勝俣鎮夫氏の校注の如く、逃亡下人^⑧を意味していたとなろう。更に同条では「身売の事、盗人の罪科たるべし」とあり、下人が主人の許可無く自分自身の身柄を他人に売り、近世の奉公人の如く自主的に主取りをすることや、第三章へで述べた三好領内の「一季奉公人」の如き者になることを「盗人」と見做えていることが窺えるのである。

つまり下人にとって自己解放を意味する譜代下人の身分からの解放としての逃亡乃至自主的な主取り等は、主人にとっては「盗み」であり、下人達の「自由」は主人達にとっては社会的に禁止された「犯罪」であったのである。これと同じことを先に見た「犯罪下人法」にも認めることが出来るのではあるまいか。近世初期にあっても、峯岸賢太郎氏が明らかにされた如く、譜代下人と構造的な連関をもつ譜代の門屋・名子達の逃亡に対しては、国家による人返しが行なわれたのである。

鎌倉期の下人には自由が大幅に認められていたのに、戦国期になるとその自由が大きく制限されてきたというこれまでの理解が正しいとすれば、この変化は網野善彦氏の言われる「民族的な次元における大転換」⁽⁸¹⁾に関連付けて考えることが出来るように思われる。例えば非農業民の職人達は鎌倉期には給免田畑を与えられ国家によって保護されていたのに、農業社会の成熟と共に彼等に対する卑賤視が現れてくるという。こうした事柄は無縁の場を中世後期の国家を代表する戦国大名達が直接的な支配・統制下に置くことによって、無縁の場自身が変質したことに直接的な原因があるのではあるまいか。無縁の場が変質すると、「境の人」である下人も又、変質を余儀無くされたのである。

戦国期に表れる新しい軍事組織として、寄親・寄子制度を挙げることが出来、又この制度を持っていた大名には、毛利、後北条、今川、武田、伊達、結城、織田、大友、六角等々を挙げることが出来るが、寄親の下にある寄子達が陪臣でなく戦国大名の直臣であるという点において、この「イエ支配権」の制限との共通性を指摘することが出来るように思われる。日本中世の在地領主達のイエには、オットー・ブルンナーのいう旧ヨーロッパにおける「全き家」⁽⁸²⁾との多くの共通性を指摘することができ、本稿で述べた日本中世後期における「イエ支配権」の制限は、旧ヨーロッパにおける「全き家」の没落、乃至「家長・主人の奴婢に対する支配権の国家による制限」に対応しているのである。

下人の犯罪を「イエ支配権」より国家の管轄下へ移行させることを戦国期の「犯罪下人法」が象徴しているとすれ

ば、本来「イエ支配権」の下にあった下人達を権力が一括して把握するという在り方の延長線上に、秀吉の所謂「身分法令」と云われる「奉公人統制令」⁽⁸³⁾や江戸幕府の奉公人の年期法令の存在が見えてくると思われる。近世における国家による下人の一括把握が、一方では下人達に「イエ支配権」からの解放をもたらしたとすれば、他方、国家によるイエ統制をも同時にもたらしたように思われる。

あとがき

今から凡そ三、四十年程前、私が未だ子供であった頃、「子供の喧嘩に親が出てはいけない」ということは立派な社会的ルールであった。つまり△子供達の作る自律的な世界には、たとえ親でも立ち入ることは出来ない▽というところが一般的に承認されていたと思うのである。このルールのバリエーションとして今風に云えば「チクル」こと、つまり「先生に云い付ける」ことも又、非難の対象であった。それからしばらくして△ドイツでは親同士が互いに子供の味方をして争うそうだ▽ということを書いて驚いた記憶がある。又、小学校の高学年の頃、H・Rの時間を通じて先生がそうした子供達の世界に次第に介入してきたことを思い出す。私一人の記憶から直ちに一般化・社会化することとは出来ないが、子供達の自律的な世界はここ数十年間の間に、急速に解体していつていただけは事実であろう。

私共の子供の頃にあったメンコやベーゴマは子供達の世界から無くなって久しい。「餓鬼大将」がいなくなった、子供が地域毎に遊ぶことが無くなったといわれている。そして代わりに出てきたものが例えば「誕生日のパーティ」である。これについては△アメリカではそういうものがあるそうだ▽と聞いて子供心に大層感動したことを覚えている。中でも今問題となっているのは「家庭内暴力」「校内暴力」更には「いじめ」である。ここでも子供達の世界か

ら喧嘩のルールが失われていることが多くの識者によって指摘されている。

辞書に依れば「子供の喧嘩に親が出る」とは「大人げないことのたとえ」とあり、子供の喧嘩に親が干渉することをタブー視することは長い間の慣習によって支えられていたのである。例えば戦国国家法の一つ『今川仮名目録』第十条には「童いさかひの事、童の上は不及是非。但し両方の親、制止を加ふべき処、あまつさへ鬱憤を致さば、父子共に可為成敗也。」とありこのルールの存在を確かめることが出来る。しかし今やこの「古き良き法」を支える実体としての子供達の自律的世界は崩壊し、子供達はバラバラに分断され、塾やお稽古に追いつて立てられている。一方、こうした時代の流れに逆らい「古き良き法」を墨守する少数派は、排除の対象として社会から総攻撃を受けているように思われる。マスコミが日夜非難しているツッパリ・グループとはこうした最後のモヒカン族はあるまいか。又こうした子供達の世界の変化に対応出来ないことが現在の学校教育を廻る根本問題なのだと私には思われる。

それはともあれ、時代を逆に遡ると、社会は均一化とは正反対の現象が数多く出現してくるようになる。旧社会にはこうした子供達の世界の如き自律的な世界は様々な形で数多く存在していたものではあるまいか。本稿で問題とした、イエの中に多くの非血縁家族である下人達を含んでいた時代に存在した「下人之咎、不可懸主人」という民間の法も又、本来は下人達の問題に主人は介入すべきではない／＼ということの意味し、下人達が自律的な世界を持っていたことに基づいているように思われる。以上は私の此れ迄の下人に関する考察の中で繰返してきたことであるが、本稿では特に戦国期の立法の持つ意味について考えた。つまり下人達の自律的な世界が次第に狭められ、下人達の犯罪が社会的な非難の対象と成った戦国期において、下人の咎人がイエに逃げ込むことを国家法の立場から禁止したものが「下人之咎、不可懸主人」という法諺を含む諸立法なのである。

注

- (1) 弘前大学教養部『文化紀要』第二号 一九八五年刊
- (2) 「『百姓』の法的地位と『御百姓』意識」(『戦国社会史論』東京大学出版会 一九七四年刊 所収) 一一七頁
- (3) 弘前大学教養部『文化紀要』第三号 一九八六年刊
- (4) 「間人」については永原慶二「村落共同体からの流出民と荘園制支配」(『日本中世社会構造の研究』岩波書店 一九七三年刊 所収)
- (5) 佐藤進一校注『中世政治社会思想 上』『日本思想大系二一』岩波書店 一九七二年刊 所収)
- (6) 『日本の歴史 一二』(小学館 一九七四年刊) 一〇三頁
- (7) 笠松宏至「追加法」二六五の補注(『中世政治社会思想 上』四四〇頁)
- (8) 網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫『中世の罪と罰』(東京大学出版会 一九八三年刊) 所収
- (9) 笠松宏至氏の「追加法」三四の頭注(『中世政治社会思想 上』四四頁) による。
- (10) 『鎌倉遺文』二八 二二三二四号には「殺害盗犯等の重科の輩、始めは召し取るといえども、後には召し使う」とある。
- (11) 『日本封建社会成立史論 上』(岩波書店 一九八四年刊) 一六頁
- (12) 佐藤進一他編『中世法制資料集 第三卷武家家法一』岩波書店 一九六五年刊
- (13) 有福孝岳「支配の基礎とその逆説」(『新岩波講座哲学一〇 行為 他我自由』一九八五年刊 所収) による。
- (14) 「死」が「絶対的主人」として「主」と「奴」に共に臨む時のことを、拙稿²では藪入りの日・閻魔参りの日等として述べた。この日、日常世界の支配関係は崩壊し、「奴」は自由を謳歌することが出来たのである。

- (15) 「『袋持』と『大袋』―中世の『人さらい』の姿」『月刊百科』二八三号
- (16) 『鎌倉遺文』一五四八八号
- (17) 佐藤進一他編『中世法制史料集 第二巻』参考資料一〇四―二一〇
- (18) 『日本古典文学大系 第二期 八四』(岩波書店 一九六六年刊) 三五一―三五八頁
- (19) 松田毅一他『東洋文庫 二二九』(平凡社 一九七三年刊) 六頁
- (20) 岡田章雄訳・注『大航海時代叢書Ⅱ』(岩波書店 一九六五年刊) 六二三頁
- (21) 佐久間正他訳・注『大航海時代叢書Ⅱ』(岩波書店 一九六五年刊) 八三頁
- (22) 牧健二「初期武家法に於ける所領没収の制度」(『歴史と地理』二三―一、四、五 一九二九年刊)、拙稿「教会領寄進文書の研究」(『史学雑誌』八五―一) 第三章二(ハ)
- (23) 「史料としての絵巻物と中世身分制」(『歴史評論』三八二号 一九八二年刊)
- (24) 中田薫『法制史論集 第三巻下』(岩波書店 一九三三年刊) 一〇九六頁
- (25) 佐藤進一他編『中世法制史料集 第三巻武家法一』(岩波書店 一九六五年刊) 一六頁
- (26) これと同様なものに近世初期の『犬枕』(『仮名草子集』(『日本古典文学大系 第二期 九〇』) 所収 四四頁) には「心もとなき物」に「男の留守に女房寺参り」を数えていることを挙げることが出来る。
- (27) 勝俣鎮夫校注(『中世政治社会思想 上』 所収)
- (28) 平凡社選書 五八(一九七八年刊)
- (29) 「坂と境」(『漂泊と定着―定住社会への道』日本民俗文化大系 六』小学館 一九八四年刊 所収)
- (30) 「中世『芸能』の場とその特質」(『演者と観客―生活のなかの遊び』日本民俗文化大系 七』小学館 一九八

- 四年刊 所収)
- (31) 前注(30)参照二二七頁
- (32) 『日本古典文化大系 第一期 三八』(岩波書店 一九五八年刊)
- (33) 『狂言集 上、下』(『日本古典文学大系 第一期 四二、四三』(岩波書店 一九六〇、一九六一年刊)、笹野堅校訂『能狂言 上・中・下』(岩波文庫一九四二、一九四五年刊)
- (34) 『『全き家』と旧ヨーロッパの『家政学』』(石井・石川他訳『ヨーロッパその歴史と精神』岩波書店 一九七四年刊 所収) 一五五頁
- (35) アドラツキー版八五、九三頁
- (36) 『共同体の基礎理論』岩波書店 一九五五年刊 四〇、四二頁
- (37) 田中健夫『島井宗室』(吉川弘文館 一九六一年刊)二〇〇～二二四頁、尚ここでは『遺言状十七箇条』が全文翻刻されている。
- (38) 石井進校注(『中世政治社会思想 上』所収)
- (39) 『西鶴織留』所収「一日暮の中宿」(『日本古典文学大系 第一期 四八西鶴集 下』岩波書店 一九六〇年刊)
- (40) 『日本古典文学大系 第二期 八五』(岩波書店 一九六六年刊)三〇三頁
- (41) 勝俣鎮夫校注(『中世政治社会思想 上』所収)
- (42) 勝俣鎮夫氏の「塵芥集・補注」三五(『中世政治社会思想 上』四五七頁)による。
- (43) 『中世の罪と罰』(前注(9) 参照) 所収
- (44) 『一揆』岩波新書 一九八二年刊 一三三頁

- (45) 「律令制からの解放」(『日本民衆の歴史二』三省堂 一九七五年刊 所収)
- (46) 「下人の隷属の二段階」(『中世封建制成立史論』東京大学出版会 一九七一年刊 所収)
- (47) 「吾妻鏡第三四」(『国史大系第三三卷』吉川弘文館 一九六五年刊 二七九頁)
- (48) 「追加法」一六一(笠松宏至校注『中世政治社会思想 上』四八頁、佐藤進一他編『中世法制史料集 第一巻 鎌倉幕府法』一一二八頁)
- (49) 永原慶二『日本の中世国家』日本放送出版協会 一九八〇年刊
- (50) 「日本中世奴隷法の基礎的考察」(『歴史学研究』四二四号)
- (51) 「御成敗式目」(『中世政治社会思想 上』一五頁)
- (52) 「中世政治社会思想 上」一五頁 頭注
- (53) 高橋昌明「日本中世封建社会論の前進のために―下人の基本性格とその本質―」(『歴史評論』三三二号)
- (54) 「中世政治社会思想 上」一九五頁
- (55) 「中世法制史料集第三卷」二〇五頁
- (56) 「中世法制史料集第三卷」二八〇頁
- (57) 「大日本古文書 家わけ第一」四九八頁
- (58) 「歴史地理」七六卷二号
- (59) 「無縁・公界・楽」三二頁
- (60) 勝俣鎮夫『戦国法成立史論』(東京大学出版会 一九七九年刊)
- (61) 事書の「否」を第二章で述べた如く、網野善彦氏に倣い「しやいなや」ではなく、「しをいなむ」と読む事が可

能であるとすれば、事書の部分が「今川法」「甲州法」とほぼ同型の「原則部」で、「右」以下「主人可懸咎」までが「塵芥法」とほぼ同型の「例外部」と考えることも可能となつてこよう。

62 「大名領国制論」(『大系日本国家史 二・中世』東京大学出版会 一九七五年刊 所収) 一三八頁 注(1)

63 勝俣鎮夫氏の「今川仮名目録・補注」六(『中世政治社会思想 上』四五一頁

64 前注(1) 参照

65 建長八年九月十五日付「西本願寺所藏惠信尼文書」(『鎌倉遺文』八〇四一号)

66 前注63参照

67 『鎌倉遺文』七二六七号

68 「中世の身分制研究と下人身分の特質」(『中世史講座4』学生社 一九八五年刊所収)

69 「中世政治社会思想 上」九三頁

70 『無縁・公界・楽』(前注68参照)「『アジュール』としての家」

71 網野善彦「中世荘園の様相」(『塙選書五』一九六六年刊) 二二七頁

72 「中世政治社会思想 上」八九頁

73 藤木久志『戦国社会史論』(東京大学出版会 一九七四年刊)

74 笠松宏至『徳政令―中世の法と慣習―』(岩波新書 一九八三年刊)

75 「相良氏法度・補注」(『中世政治社会思想 上』四四八頁

76 『日本封建制度成立史』(清水弘文堂書房 一九六九年第四版刊) 尚、所従「下人とするのが現在の学界の通例であり、事実その様に考えるべき用例も多いが、この牧説には、捨てがたい魅力がある。

- 77 『中世政治社会思想 上』二三四頁頭注
- 78 「莊園公領制社会における都市の構造と領域」(『歴史学研究』五三四号 一九八四年三月)
- 79 『中世政治社会思想 上』二二〇頁
- 80 「近世前期の門屋・名子について」(『都立大人文学報』一八五号 一九八六年三月) この他、近世初期の人返しを扱ったものに、渡辺信夫「近世初期人返会の展開」(東北大学『日本文化研究所研究報告』別巻十五 一九七八年)がある。
- 81 『無縁・公界・楽』(前注80参照)「人類と『無縁』の原理」
- 82 前注84参照
- 83 高木昭作「所謂『身分法令』と『一季居』禁令」(『日本近世史論集上巻』吉川弘文館 一九八四年刊 所収)